特集「伝える」を問い直す

過去あるいは遠い地域のできごと、限定的な体験や創造などを、子どもから享受できるかたちで伝えていくことは、児童文学のひとつの大切な務めといえます。しかし、「伝える」ということは、簡単なことではありません。

何かを「伝える」ことが別の何かを見えなくしたり、耳触りなことや不都合なことが「伝える」ときに省かれたり、「伝える」ことそのものが暴力性をはらんでいたりすることもあります。それでもなお、「伝える」ことにとりくみ、さまざまな工夫や努力をしている活動や作品ももちろんあります。

今号では、「伝える」ことを無条件によしとせず、その実質・本質に迫ってみたいと思います。